奈良県国語教育研究会報

第109号

発行所
奈良県
国語教育研究会
発行人
会長　橋本　宗和
事務局
吉野町立吉野小学校
吉野郡吉野町上市2298
☎0746－32－4333
FAX0746－32－8982

「書く力」を育てるために

奈良県国語教育研究会
副会長　原井葉子

本会では、昨年度より、「付けたい力を育む『書くこと』の学習活動の創造」を研究主題に、実践研究に取り組んでいます。今年度の秋季研究大会では、会場校での公開授業や各部会の実践報告から多くを学ぶとともに、自らの実践を改めて振り返る機会となりました。

一　書きたい「思い」をもつこと

二年生を担任したときに、「自分が育てたミニトマトの生長を、おうちの人に伝えよう」という課題で、作文指導を行いました。子どもたちは、自分が植えたミニトマトの苗に、毎日水をやり、草抜きをして、大切に育てました。また、毎週、何センチ伸びたかを計測し、色や形などの変化を観察、記録しました。そして、ついに赤くなった実を口にしたとき、「先生、早く作文書こう！」と、子どもたちの目が輝きました。世話や観察をする中での発見や驚き、収穫の喜びが、子どもたちに、言葉にして伝えたいという思いをもたせ、書くことへの原動力になったのでした。

書くことの指導において、相手意識、目的意識を明確にもたせることは言うまでもありませんが、子どもの「書きたい」という思いを育てること、そのために、日常生活から子どもたちの実態を把握し、適した題材を選定することが肝要だと考えています。

二　伝えるための「言葉」をもつこと

伝えたい、書きたい思いがあっても、そのことを表現するための言葉をもたない子どもの姿を、目にしてきました。気持ちや様子、伝えるべき内容を表現するのに必要な言葉を獲得するには、そのための指導や環境づくりが大切です。

今年度秋季研究大会会場校の葛城市立忍海小学校では、校内の教室、廊下、階段など、子どもたちの目につく場所に、四季の言葉や気持ち・様子を表す言葉、言葉を使った遊び、子どもの作品などを掲示し、学校全体で児童の言葉を育てる環境が整えられていました。

このような環境づくりや、辞書の活用、読書、詩の音読・群読、視写・聴写など、日々の取組の積み重ねが、言葉を育てることにつながります。様々な機会を通して、子どもたちに多くの言葉と出合わせたいものです。

三　自ら書くことから

先輩の先生から、「作文指導は、まず指導者自らが書くこと、モデル文を作成することから。」という指導をいただき、心がけてきました。教科書にも、教材としてのモデルはありますが、自分で書いてみると、思いの外、書きにくい題材や難しい課題を、子どもに課していたことに気付くことがあります。

この言語活動を通してどのような力を付けたいのか、題材が子どもの実態に適しているのか、子どもが難しいと感じるのはどこなのか、そのためにどのような手立てや指導の工夫が有効なのか、など、自分が実際に書いてみることで、指導の方向性、具体性が明確になってきます。

書くことの指導の教材研究で、必要な過程だと考えています。

四　言葉の力

古来より、言葉には、人を動かす力、「言霊（ことだま）」があると伝えられてきました。言葉で伝えることで、相手に感動や喜びを与えた、相手を説得できた、相手と心を通わせ合った、と実感できる体験を、子どもたちに積ませたいものです。

豊かな言葉の使い手を育てるために、今後も、本会とともに、実践研究を重ねていきたいと思っています。

（壱分小学校）

冬季研究大会講師

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官　**菊池　英慈　先生のご紹介**

平成元年に茨城大学教育学部を御卒業後、茨城県公立小学校教諭として五年間勤められました。その後、茨城大学教育学部附属小学校、同中学校を経て、平成十五年から再び茨城県公立小学校にお勤めになられました。平成二十三年からは、茨城県教育研修センター指導主事となられました。平成二十六年からは、茨城県公立小学校教頭を、平成二十八年からは、大子町教育委員会事務局指導主事を務められています。現在、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、国立教育政策研究所課程研究調査官・学力調査官を務められています。

・「ずれと共有化が、学習意欲を高める」（『実践国語研究２０１０』特集　小学校の実践授業の展開）
・「心に寄り添い、心を通い合わせていく国語的活動」（『基幹学力の授業２００８』学級づくりを支える国語的活動）
・「比較する目と関係付ける言語力」（『実践国語研究２００７』実践の広場）
・「ひろがる、ふくらむ映像の世界」（『国語教育２００７』特集「情報リテラシー」教育がなぜ必要か）
・「ノート指導は書き方を教えることから」（『基幹学力の授業２００６』特集　すぐに使える「ノート指導」のアイデア）　など。

―冬季研究大会要項―

期　日
平成三十一年二月十四日（木）

会　場
奈良県立教育研究所

日　程
12時45分～13時　受付
13時～13時15分　開会行事
13時20分～15時　分科会

「平成三十年度国語学力診断」集計結果報告・学習指導法の提案及び研究協議

	提案者	助言者
小学校低学年	中背　真一（三郷北小）	早川賀英子（畝傍東小）
小学校中学年	藤井　彩央（葛城小）	岡島眞寿美（忍海小）
小学校高学年	堀川奈津子（新庄北小）	髙塚　力蔵（生駒東小）

司　会
河野　雄一（筒井小）

指　導
上北　浩平（白橿北小学校校長）

15時10分～16時30分　特別講演

演　題
育成すべき資質・能力を明確にした国語科授業づくり
文部科学省初等中等教育局教育課程課
教科調査官　菊池英慈氏

16時30分～16時40分　閉会行事

国語学力診断に対するご意見から

本年度の「国語学力診断」は、小学校、約六万一千部の御採用をいただきました。また、結果集計にもたくさんの御協力をいただきました。本当にありがとうございました。

児童の学力傾向や実態、国語学力診断に関してお寄せいただいた御意見の一部を紹介いたします。

〈小学校低学年〉

・読むことの問題文は子どもたちにとって親しみやすい内容で興味をもって読んでいた。
・問題文をしっかりと読まずに解答している場合があり、文章を読んで解答することを繰り返し指導していく必要を感じた。
・記号で答えなければいけないところを言葉や文で書いている児童が多くいた。
・漢字の読み方や送り仮名の使い方を問われる問題は正答率が低かったので、繰り返し学習して定着させたい。
・二年生（3）（4）などの事柄の順序や細部の読みの問題になると、丁寧に読めていないのか正答率が下がっている。
・二年生（6）は日付けの読み方が定着しておらず、誤答が多かった。
・書くことについては、内容を詳しく書いたり、文を分けて整理して書くことは難しいようで、今後の指導に向けての課題が見つかった。

〈小学校中学年〉

・三年生（7）は、ごんじいが主語なのにきつねの子どもが主語だと勘違いしての誤答が多かった。
・「たちまち」の意味や「生きる」の意味などで誤答が多く、語彙力の少なさが分かった。
・類義語の間違いが多いのは身に付けている語彙の少なさからだと思われる。
・四年生（2）は不必要な言葉を入れてしまい、意味が変わってしまって誤答になっている児童が多数いた。
・四年生（4）では「ゆめごこち」という言葉だけに着目して「ゆめのようだ」と書いている答えを選んでいる。
・主語と述語の関係についての正答率が低く、復習が必要だと思った。
・書くことでは、カマキリのオスとメスの違いについてほとんどの児童が書けていたのだが、自分の考えや思ったことまで書けている児童は少なかった。
・書くことについては、段落構成や内容に応じた記述の面で課題が見られる。設問に合った文章を書けるような指導をしていく必要がある。

〈小学校高学年〉

・五年生（1）では、「夏ガモ」という正答を読み取れていなかった児童が多く、「飛び立った」の文の近くの「カモだ」や「セッカ」という誤答が目立った。
・五年生（5）や（6）では解答欄の前後にある記述を読んでいないために誤答になる児童が多かった。
・五年生（6）では、文中の言葉を使って二十五字以内という条件が難しかった。
・敬語の誤答が多く、再度子どもたちに指導する必要を感じた。
・六年生の読むことでは、心情を読み取る問題が多く、本学級の児童の弱いところがよく分かった。
・作文については、条件を満たして書くことができていなかった。段落を分けて書く習慣、書く事柄を落とさずに書く練習が必要だと思った。

素材文や設問についての御指摘や御意見は、本学力診断が児童の実態を把握するためにより適切な診断となるよう、今後の参考にさせていただきます。

児童の学力傾向や実態に基づく授業改善については、冬季研究大会の研究協議のテーマとし、また、県内の全小学校に配布する「国語学力診断結果報告書」にその資料を掲載します。御活用いただけると幸いです。

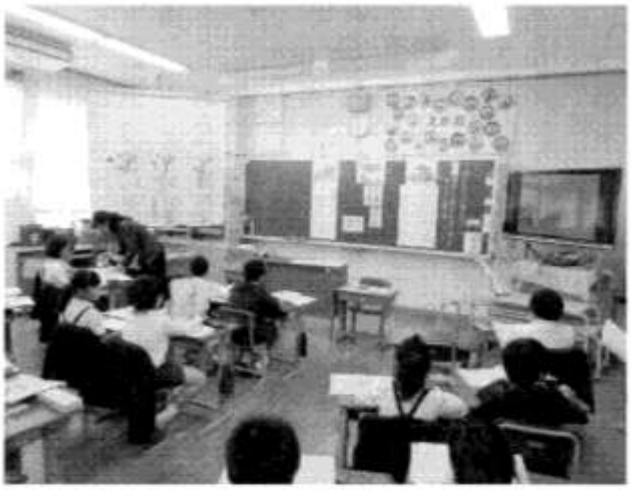
平成三十年度 秋季研究大会を ふりかえって

事務局　田中奈生

空は深く澄み渡り、木々の梢も色づき始めた秋の良き日に、葛城市立忍海小学校にて、本年度の秋季研究大会を開催いたしました。

前半は、会場校である忍海小学校で、低・中・高学年の三学級の授業公開をしていただきました。忍海小学校では、研究主題を「主体的に学び、考え、表現することもの育成～『書くこと』の指導を通して～」として、書く力の育成に取り組んでこられました。

どの学年も、児童の表現力を高めるための手立てが多くちりばめられた授業でした。主体的に目的意識をもって学習に取り組むことができるように工夫された、構成を捉えやすいワークシート、自分たちの学習を視覚化した掲示物、スモールステップの書くためのヒントの提示などがなされていました。



授業での児童の姿は、「書きたい」「書くことが楽しい」という意欲で溢れていました。書く力を高めるための大切な要素である「書きたいという思い」、それを引き出すための多くの工夫と授業の在り方を明示していただきました。

後半は、本会の分科会が開かれ、本年度の研究主題である「付けたい力を育む『書くこと』の学習活動の創造～実証的な学習過程の重視～」をめざした研究と授業実践の報告が行われました。

本年度は、より一層の書く力の向上のため、「書くこと」のどの事項に特化した学習過程であるかを明確化し、研究実践に取り組まれていました。

どの実践も、相手意識と目的意識をはっきりさせたもので、見通しをもつための学習計画やモデルの提示もあり、「書くこと」の力を育むことをめざした学習活動について、一定の研究成果が示されました。それに加え、低学年では、学習意欲を高める題材の設定について、中学年では、推敲、交流によってよりよい文章を書くということ、高学年では、自分の考えをもつということ、中学校では、書くためのキーワードを提えることに重点をおいた学習過程の提案がなされました。

研究協議では、参加された方々と意見交流が行われ、児童の実態に応じた、自らの力で書く達成感を味わわせる取組について意見交流がなされました。

大会記念講演には、山口大学大学院教育学研究科教授の岸本憲一良先生をお招きしました。御講演では、「『ことば』そして『ひと』」という演題のもと、ことばの向こうには必ず人がいるという、ことばのもつ役割について、御教授いただきました。

岸本先生の作られた、人と人の出会いやつながりを感じさせる口語自由律短歌から御講演は始まり、会場全体は終始温かい空気に包まれていました。

国語科における領域すべてにおいて、相手があり、その相互を想定することにより、深い学びが生まれるということを、具体的に教えていただきました。「ひと」を大切にした共創的な学びという新しい視点を示していただきました。

本研究会では、今後も研究と実践を進めていき、付けたい力を育む学習過程の創造をめざしてまいります。

教室を最大の言語環境に

片桐西小学校　豊田　奈和子

国語の授業で子どもたちに「言葉の力」を付けていくことは、とても大切なことである。それと同時に、日々の生活の中で子どもたちの「言葉の力」を育てることも忘れてはいけないことだと考えている。これまでも言われてきたことだが、子どもたちにとって教師の言葉がお手本になり、教室掲示などの教室環境が子どもたちの「言葉の力」を育んでいく。そこで、私自身も先輩の先生方から学ばせていただいてきた日々の学校生活の中で子どもたちの「言葉の力」を育む実践について紹介したい。

（一）おとなりトーク

話す・聞くの基本は、二人での対話にあると考える。そこで、帰りの会の時間、二人組になり今日の出来事について対話「おとなりトーク」を行う。丁寧な話し方で、「今日はどうでしたか？」から始め、その返答から対話するよう指導する。

（二）読み聞かせ

朝の読書の時間を活用して、自分の好きな本や子どもたちに読ませたい本の読み聞かせを行う。週に一回程度、低学年なら全文の読み聞かせ、高学年ならブックトークなど、時間に応じた内容で進める。読んだり紹介したりした本は、教室に置き、その後子どもたちが手に取って読めるようにする。

（三）漢字の木・言葉の木

既習の漢字を、使い方（熟語など）を示したカードにし、「漢字の木」として教室掲示する。このとき、学習した漢字を増やすだけでなく、日常よく目にする漢字なら未習であっても言葉として掲示するようにする。これを、漢字ではなく言葉、特に形容詞・形容動詞、比喩などの様子を表す言葉、表現などで行うのも良いと考える。

いずれの取組も、目新しいことではない。しかし、どの取組も一年間続けることが大切だと考える。そのためには、学級の実態、目の前にいる子どもたちに合う方法、無理せず続けることができる方法にアレンジしながら実践していくと良いであろう。日々の生活の中で何か一つこだわりをもって続けることで、教師自身が言葉に敏感になったり、子どもたちの言葉に対する感性が豊かになったりすることにつながると考える。

このように、一日の大半を過ごすであろう教室を子どもたちにとって最大の言語環境にするために、自分自身の言葉を見直し、環境を整えることをこれからも大切にしていきたい。

主体的に書くことができる工夫を

忍海小学校　磯川　沙耶

これまでの「書くこと」の授業の中で、書き出しが分からず手が止まってしまう、そもそも文章を書くことに苦手意識をもつ児童にたくさん出会ってきました。学校全体でも、相手や目的に応じて効果的に文章を書く力や複数の資料を活用したり、条件に沿って文章を書いたりする力が弱いことが分かりました。そこで、どの学習や授業づくりにおいても欠かせない「書くこと」を通して、論理的に自分の考えを相手に伝える力が必要であると考え、研究主題を設定し、取組を進めてきました。その中で大切にしてきた、得意な子も苦手な子も書くことができ、達成感を味わえる手立てのうち、効果的だったことを四つ御紹介します。

一つ目は「魅力ある題材の設定」です。具体的な児童の姿を捉え、まず付けたい力を見極め、次に最適だと考えられる言語活動を選定します。そのためには、児童の学習意欲を高め、課題解決、課題探求の過程となるもの、かつ指導事項を達成できる魅力ある題材が必要です。目的に合った文種、相手意識・目的意識を児童自身が意識して書くことができるものを選定することを大切にしてきました。

二つ目は「指導と評価の一体化」です。授業の最初だけでなく、途中にもめあてを確認する場面を設定することも有効でした。また、「～ができたら○、～までできたら◎です。」と具体的な目標を示すことで、どの子も自分なりの目標を設定し、懸命に取り組む姿が見られました。

三つ目は「ワークシートの工夫」です。ワークシートには、付箋を活用して構成を考え、その下にすぐ文章を書けるもの、書き出しの言葉を載せたもの、場面の様子を具体的に想像できるものなど様々な工夫を凝らしました。ヒントカードや具体的な言葉がけなど授業中の手立ても合わさり、書くことが苦手な子も、手掛かりを頼りに何度も消すことなく文章が書け、達成感を味わうことができました。

四つ目は「モデル文」についてです。モデル文は、ゴールとする文章のイメージがもちやすく、文章の構成や接続詞などの表現方法を理解させるのに有効でした。さらに文章を書くための資料となり、交流の過程においても相互評価の観点となるため、書くことの授業を展開するにあたっては必要不可欠なものでした。

また、言葉が自然と目に入る、言葉に親しめる環境づくりも児童の知識や語彙を豊かにするために大切にしてきました。

これらを意識して取り組んだことで学習の活性化が図られ、書けたことを喜ぶ児童の姿がたくさん見られました。今後も、これまでの研究で得られた力を土台として内容を深め、児童の学びの向上のために、取組を継続していきたいです。

編集後記

この度は、学力診断の御採用ありがとうございました。

今後も、県内の国語教育の動向を知る情報誌として、誌面の充実を図っていきたいと思います。御示唆、情報等おありでしたら事務局までお知らせください。（田中）